

2020 年度
関西福祉科学大学大学院
社会福祉学研究科
心理臨床学専攻

修士論文題目

保育園から小学校の移行期における保護者の入学不安に関する研究
— 養育態度・育児ストレス・子どもの特性との関連から —

指導教員（ 谷向 みつえ ）

社会福祉学研究科心理臨床学専攻

学生番号 11920002

氏名 楠瀬 浩子

目次

I. 問題	1
目的	3
II. 方法	4
1. 調査対象	
2. 調査時期と手続き	
3. 倫理的配慮	
4. 調査内容	
III. 結果	6
1. 母親の入学不安尺度についての検討	
2. 母親の入学不安と育児ストレスインデックス(PSI-SF)との相関	
3. 母親の入学不安尺度・育児ストレス PSI-SF と PNPS の相関	
4. 母親の入学不安尺度・育児ストレス PSI-SF と子どもの強さと困難さ・自己主張と自己抑制との相関	
5. 母親の入学不安尺度・育児ストレス PSI-SF と母年齢・出生順位・子どもの数・親経験年数の相関	
6. 母親の入学不安尺度と男女差の相関	
7. 入学不安と出生順位の関連	
8. 入学前と入学後の尺度と母親の入学不安・育児ストレス PSI-SF・養育行動 PNPS・子どもの強さと困難さ・自己主張と自己抑制の平均値の比較	
9. 新型コロナウイルスとの関連	
IV. 考察	14
1. 母親の入学不安尺度の信頼性、妥当性について	
2. 母親の入学不安と親経験年数・こどもの出生順位・男女差	
3. 母親の入学不安尺度と育児ストレス PSI-SF・肯定的養育尺度 PNPS の関連	
4. 入学前と入学後の尺度と母親の入学不安・育児ストレス PSI-SF・養育行動 PNPS・子どもの強さと困難さ・自己主張と自己抑制の平均値の比較	
5. 新型コロナウイルスとの関連	
6. まとめ	
7. 謝辞	
V. 引用文献	17

I 問題

平成 29 年に改正された「小学校の学習指導要領」では、幼児期から児童期への教育への移行は子どもの学びと発達の連続性の観点から幼小の連携や接続が重要であることが指摘されている。また、「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定子ども園教育・保育要領」においても、これまで以上に保育所、幼稚園、認定子ども園等の就学前の保育・教育施設と小学校との連携強化や連続性と、一貫性のある「円滑な接続」の重要性が示されている。これらの背景には近年、小学校入学後に学校生活に不適応を起こす児童の問題である「小 1 プロブレム」がある。

尾木(1999)は「小 1 プロブレム」は「学級崩壊」とは異なり、学級集団が形作られない未形成状態の現象であるという。また、小 1 プロブレムの「先生のいう事に注意を向けない」「じっと座ってられない」「友達の動きにつられてしまう」等の顕在化した問題は、環境との関係の中で育つ子どもの自己制御機能の弱さから捉え直すことが必要と述べている。さらに尾木によると、大阪人権教育研究協議会は、「小 1 プロブレム」を「幼児期を十分生ききれてこなかった、幼児期を引きずっている子どもが起こす問題」であり、「子どもたちが十分育ちきれないまま学齢期を迎え、その変化に学校が対応しきれないために起きている現象」と捉えている。という。

また「小 1 プロブレム」について検討した有嶋(2017)の調査では、子ども自身に原因があることを検討した結果、「特別な支援が必要とする子どもが増えている」、「友達関係をうまくつぐれない」、「集中力がない」、「人の話を落ち着いて聞けない」、「我慢することの経験、ぶつかり合うことの経験などが不足している」などが上位に上がっている。これらは子どもの社会性の発達に起因する事柄である。

盛・尾崎(2007)は、小学校 1 年生を対象に、社会的スキル、基本的生活習慣、友人関係と学校適応との関連について研究を行い、自己コントロールが高い子どもや基本的生活習慣が定着している子どもは集団適応がよく、良好な友人関係は学校生活における安心感に影響を及ぼすことを明らかにした。逆に言うと、自己コントロールと基本的生活習慣の習得度が悪いと適応が悪くなるため、友達関係を良くして学業への自信をつけさせることが学校適応を向上させる要因になることを示唆している。要するに、自己コントロールや基本的生活習慣が身についている小学 1 年生の方が、社会的スキルが高く適応が良いことを明らかにした。

幼児期から児童期への移行期の子どもの心理について、田邊(2010)は「安心する」とは不安がなく落ち着いていることと定義している。その結果「適応する」とは新しい環境の中でも安心して自分を発揮することであり、児童の不安を軽減させることが生活環境への適応につながるとした。つまり、不安が持続していると「安心する」ことができず、「適応する」ことは難しいといえる。また、山本・S・ワップナーら(1992)は、幼稚園から小学校への移行で子ども達は物理的環境、対人的環境、社会文化的環境などの変化にさらされるが、この変化に対して過度な緊張や不安を感じると危機的な移行になる場合があり、小学校へ適応するにはこのような危機的移行を乗り越えなければならないと述べている。

以上のように、小学校入学に際する幼児期から児童期への移行は、危機をも

はらむ変化の時期で、子どもは安心した環境の中で保護者に養育されることが重要と考えられる。Landesmanら(1998)は、子どもが幼稚園から小学校へ移行する際、保護者は友達との関係や環境の違いといった様々な困難を子どもが経験することを心配し、見守っていることを明らかにしている。

しかし、小学校入学については子どもだけでなく、保護者にとっても期待や不安を抱くものであることが指摘されている。神田ら(2007)は、2001年から母親の子育てに関わる不安の縦断的研究を行い、2007年度に幼児期から児童期への移行期における親の子育て不安について調査を行った。その結果、ほとんどの保護者が、入学後に子どもの成長を感じていたが、2割の保護者は「先生の対応」や「勉強面」で入学前の予想と異なっていたことを述べ、3割が子どもの学校生活に不安を感じていることが示された。養育する保護者の育児環境や、子育てに関わる協力体制が、子どもの小学校適応にも影響を及ぼしているのではないかと考えられる。

親の養育行動は、子どもの発達や問題行動を規定する中心的な要因として、古くから注目されてきた。実際、親の養育行動は子どもの抑うつ、不安、引きこもりなどの内在化問題(子ども自身を悩ませる情緒・行動問題)や攻撃行動、いじめ加害、非行などの外在化問題(周囲の他者を困らせる情緒・行動の問題)だけでなく共感、援助行動などの向社会行動とも関連することが実証的に明らかにされている。

島田ら(1997)は、現代の母親たちが感じている子どもや育児に対する不安や苛立ちは通常『育児不安』と呼ばれ、具体的な育児上の心配事、育児をしていくことに対する不安、育児をしている母親にみられる危機的状況を含めた心理的不安そのものを総称して育児不安と呼んでいる。また、佐藤(1994)は育児ストレスを「子どもや育児に関する出来事や状況などが母親によって脅威であると認知されることや、その結果母親が経験する困難な状態」と定義している。さらに、中谷ら(2006)は、育児ストレスは虐待行為を促進する重要な先行要因になり得ると述べ、育児ストレスがネガティブな認知の促進要因として影響し、育児生活による疲労感や負担感は母子の相互作用において母親が子どもの行動をネガティブに捉える傾向を強めると報告している。また、中嶋は、(2005)

養育行動の柔軟性が高い母親は虐待、特にネグレクト、心理的虐待を敏感に認知しやすく育児不安が低いことを明らかにし、虐待認知の重要な要因であると述べている。

近年では、自閉症スペクトラム障害や注意欠如多動性障害などの発達障害を持つ子どもの親が、子どもの問題行動への対応に苦慮した結果、厳しい叱責・体罰や放任などの不適切な養育行動を取り、それが子どもの問題行動の持続・悪化や新たな問題行動の生起につながるという悪循環の存在が示唆されている。

母親の育児負担感に関連する個人的な因子としては、母親の自己効力感(self-efficacy)が挙げられている。自己効力感が高い個人は自身がその行動をうまく行うことができると感じているため必要な行動をとる可能性が高くなり、かつ行動に伴うストレスを感じにくいとされている(Bandura,1979)。

上記の先行研究を踏まえ、小学校入学という子どもの大きな環境の変化に伴う母親の不安に関して、養育態度や育児不安、子どもの特性がどのように関連するのかを明らかにする。

本研究の目的

本研究では、子ども園年長児の保護者(母親)を対象に、小学校入学前と入学後における子どもの就学に関する保護者の不安構造を調べると共に、養育態度や子育てストレスとの関連を明らかにすることを目的とする。また、子どもの自己制御や社会性が就学へのスムーズな移行を支える要因と考えられるため、子ども園ならびに学童保育所の保育者に「子どもの強さと困難さ」・「幼児の自己主張と自己抑制」に関する調査を行い、子どもの要因と母親の不安との関連を検討する。

当初の研究計画では入学を挟んだ2020年2月と6月に調査予定であったが、4月から5月にかけて新型コロナウイルスの影響で小学校の閉鎖の影響で入学式が中止となった。そのため、調査対象の新入生は新しい学級での通常集団体験ができないまま時期が後送りされる状況になった。そこでこの通常とは異なる状況の影響を検討するため、新型コロナに対する調査内容を追加することにした。本研究によって、就学前の保護者対応の要点と、子どもへの有効な指導や円滑な関わりに役立つ知見が得られると考えられる。

II. 方法

1. 調査対象

A 子ども園年長クラス保護者 60 名を対象に調査協力を求めたところ、第 1 次調査に 45 名の母親が回答してくれた。また、2 次調査への回答は 30 名であった。子どもに関する調査は、年長クラス担当保育士、ならびに学童保育担当者 6 名が回答した。1 次・2 次調査の両方に回答した母親は 20 名であった。

母親の年齢、20 代 3 名 (6.7%)、30 代 28 名 (62.2%)、40 代 14 名 (31.1%) であった。こどもの性別、男子 27 名、女子 18 名。出生順位、第 1 子 26 名 (57.8%) 第 2 子 14 名 (31.1%) 第 3 子 5 名 (11.1%) であった。

2. 調査時期と手続き

【第 1 次調査 (2020 年 2 月)】

A 子ども園年長児保護者を対象に (1) から (4) の質問紙調査を行う。

年長児担任保育士に、年長児のチェックリスト (5) (6) の記入を依頼する。

【第 2 次調査 (2020 年 8 月)】

第 1 次調査と同じ保護者を対象に質問紙調査を行う。(コロナに対する質問紙調査を追加)。第 1 次調査から継続して A 学童保育所に通所している児童に対して学童保育担当者に子どものチェックリストの記入を依頼する。

3. 調査内容

保護者対象の質問紙調査も内容 (1) -(4) と、保育者への調査内容を以下に示す。

- (1) 「母親入学不安尺度 (楠瀬,2019)」学校生活の適応、学校での友達や先生との関係、基本的な生活習慣について、小学校入学前の子どもを持つ母親が持ちやすい不安に関する項目を収集し、全 18 項目 5 件法で尋ねた。
- (2) 「育児ストレスインデックス短縮版 (PSI-SF)」(浅野・荒木・荒屋敷・市原・大橋・佐藤・白畑・奈良間・廣瀬・吉田・丸・山口, 2014)
下位尺度に「子どもの側面」と「親の側面」があり、「子どもの側面」は「親を喜ばせる反応が少ない」「子どもの機嫌の悪さ」と「子どもが期待どおりにいかない」の愛着に関する 7 項目と、「子どもの気が散りやすい/多動」「親につきまとう/人に慣れにくい」「子どもに問題を感じる」、「刺激に敏感に反応する/ものに慣れにくい」発達懸念に関する 5 項目から構成されている。「親の側面」は PSI の下位尺度のうち「親役割によって生じる規制」「社会的孤立」「親としての有能さ」「親の抑うつ・罪悪感」と「親の健康状態」6 項目と「夫との関係」の 2 項目から構成されている。全 19 項目 5 件法の自記式質問紙である。
- (3) 「肯定的・否定的養育行動尺度 (Positive and Negative Parenting Scale: PNPS)」(辻井・伊藤・浜田・村山, 2018)
「肯定的養育行動」には、「関与・見守り」「肯定的応答性」「意思の尊重」の 3 つの下位尺度があり、愛情、感謝、楽しさなどの肯定的感情に基づき、子どもの意思、感情、安全に配慮した子ども中心の養育行動の程度を表す。「否定的養育行動」には、「過干渉」、「非一貫性」、「厳しい叱責・体罰」の 3 つの下位尺度があり、不安、焦り、怒りなどの否定的感情に基づき、親自身の都合や感情を優先した親中心の養育行動の程度を表す尺度である。全 24 項目 4 件法の質問紙である。

(4) フェイスシート

「子どもの性別」・「きょうだいの数」・「長子の年齢」・「保護者(母)の年齢」・「保護者(母)の就労形態」。

(5) 「日本語版子どもの強さと困難さアンケート(Strengths and Difficulties Questionnaire: SDQ)」(Matsuishi et al.,2008)

子どもの強さと困難さアンケートは、4~18歳の子どもの日常行動を評価し、情緒や行動面のいわゆる精神症状を把握するためのツールとして英国で開発された質問紙である(Goodman,1997)。下位尺度に「社会的行動」「多動・不注意」「情緒不安定」「友達関係問題」「問題行動」がある。25問という少ない項目数で、幼児期から青年期にかけての適応と精神的健康の状態を包括的に評価できることから欧米諸国をはじめ多くの国々で使用されている。日本語版については、4-12歳を対象にした保護者評価(Matsuishi et al., 2008)や、7-15歳を対象にした保護者評価と教師評価(Moriwaki & Kamio, 2013)などの先行研究において、妥当性・信頼性が確認され、臨床群及び境界群を抽出するためのカットオフ値が報告されている。全25項目・3件法の質問紙で、子ども園ならびに学童保育の担当保育者に回答を求めた。

(6) 幼児の自己主張-自己抑制に関する質問紙(首藤,1995)

この質問紙は、幼児の行動の自己制御機能の個人差を測定するために、柏木(1988)が開発した「幼児の行動評定尺度」を参考に首藤(1995)が開発した質問紙である。自己制御機能は、「自己の欲求や意志に基づいて自発的に行動を調整する能力」(新名,1991)と定義され、これには、2つの側面がある(柏木,1988)。「自分の意志や欲求を明確にもち、これを他人や集団の前で表現し主張する」自己主張の側面と、「集団場面で自分の意志や欲求を抑制・制止しなければならないとき、これを抑制する」自己抑制の側面である(柏木,1988)。首藤(1995)は、幼児の自己制御機能を上の2つの側面からとらえ、自己制御機能の個人差が日常的な向社会的行動とどのように関連するのかを検討している。「自己主張尺度」8項目、「自己抑制尺度」12項目、全20項目・5件法の質問紙である。

4. 倫理的配慮

調査にあたり、関西福祉科学大学の研究倫理委員会の承認を得た。また、調査協力者に対しては、職員への説明に加えて保護者会の場で趣旨説明を行った。また、調査用紙には自由意志での参加、個人情報への配慮、同意の撤回について掲載した。さらに、調査用紙に本研究の研究目的と方法を記載した案内文書を添付した。

Ⅲ. 結果

1. 母親の入学不安尺度についての検討

1) 因子分析による作成項目についての分析

母親の入学不安尺度の 18 項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、解釈可能性から 3 因子を抽出した。因子分析の結果と因子間相関を表 1 に示す。

第 1 因子に負荷量の高い項目は「授業時間中、自分の席に最後まで座ってられないかもしれない」「宿題がちゃんとできないかもしれない」「勉強についていけないかもしれない」「学校で気に入らないと、物を投げたり、暴れたりするかもしれない」「学校の決まりが守れないかもしれない」「苦手なことはすぐにあきらめてしまうかもしれない」「人の話を最後まで聞けないかもしれない」「担任の先生となじめないかもしれない」「友達を困らせるかもしれない」であった。したがって、この因子は、学校での集団生活の中で適応していく力に対する不安を表す因子と解釈された。そこで、この項目は【学校生活適応への不安】と命名した。

第 2 因子に負荷量の高い項目は「いじめにあうかもしれない」「食べ物の好き嫌いで給食が食べられないかもしれない」「給食が時間内にたべられないかもしれない」「友達ができないかもしれない」

「先生や友達に自分の伝えたいことが言えないかもしれない」であった。したがって、この因子は自己主張と自己抑制を基盤とする学校での友達や先生との対人関係を表していると解釈された。そこで、この項目は【対人関係への不安】と命名した。

第 3 因子に負荷量の高い項目は、「朝、登校時間までに着替えができないかもしれない」「明日の学校の準備ができないかもしれない」「体育など着替えが間に合わないかもしれない」「決めた時間に寝ないかもしれない」であった。したがって、この因子は家庭での生活習慣を表していると解釈された。そこで、この項目は、【基本的な生活習慣への不安】と命名した。

2) 内的整合性の検討

尺度の内的整合性を確認するために、Cronbach の α 係数を求めた。その結果、全体の α 係数は.906、第一因子は.879、第 2 因子は.814、第三因子は.791、であり、尺度ならびに下位尺度の信頼性は十分高いといえる。その結果を表 1 に示す。

表1 入学不安尺度の因子構造（主因子法・プロマックス回転）

項目	因子		
	1	2	3
【第1因子】学校生活適応への不安（$\alpha = .879$）			
授業時間中、自分の席に最後まで座ってられないかもしれない	0.785	-0.146	0.291
宿題がちゃんとできないかもしれない	0.727	-0.125	-0.122
勉強についていけないかもしれない	0.725	0.111	-0.023
人の話を最後まで聞けないかもしれない	0.711	0.063	-0.339
苦手なことはすぐにあきらめてしまうかもしれない	0.699	0.035	0.192
担任の先生となじめないかもしれない	0.548	-0.069	0.225
学校で気に入らないと、物を投げたり、暴れたりするかも	0.478	0.177	0.136
学校の決まりを守れないかもしれない	0.417	0.309	-0.123
友達を困らせるかもしれない	0.406	0.328	0.021
【第2因子】対人関係への不安（$\alpha = .814$）			
いじめにあうかもしれない	-0.178	0.723	0.214
友達ができないかもしれない	0.099	0.705	-0.122
食べ物の好き嫌いで給食が食べられないかもしれない	-0.128	0.695	0.125
給食が時間内にたべられないかもしれない	0.100	0.681	-0.153
先生や友達に自分の伝えたいことが言えないかもしれない	0.126	0.630	0.011
【第3因子】基本的生活習慣への不安（$\alpha = .791$）			
朝、登校時間までに着替えができないかもしれない	-0.246	0.070	0.944
明日の学校の準備ができないかもしれない	-0.083	0.057	0.823
体育など着替えが間に合わないかもしれない	0.141	-0.153	0.505
決めた時間に寝ないかもしれない	0.421	0.060	0.463
因子間相関	2	.567	
	3	.509	.544

2. 母親の入学不安と育児ストレスインデックス（PSI-SF）との相関

入学不安尺度と育児ストレス（PSI-SF）の相関係数を求めたところ、表2に示す結果が得られた。入学不安尺度の合計点ならびに「学校生活適応への不安」は、育児ストレス合計点、「親の側面」、「子どもの側面」すべてとやや高め相関が見られた。「基本的生活習慣への不安」と「対人関係への不安」は、育児ストレスの合計点と「親の側面」に中程度の相関が見られた。

育児ストレス「子どもの側面」は【親を喜ばせる反応が少ない】・【子どもの機嫌の悪さ】・【子どもが期待どおりいかない】・【子どもの気が散りやすい/多動】・【親につきまとう/人に慣れにくい】・【子どもに問題を感じる】・【刺激に敏

感に反応する/ものに慣れにくい】から構成され、これらの項目と「学校生活適応への不安」に関連があることが示された。

また、育児ストレスの「親の側面」は【親の役割によって生じる規制】・【社会的孤立】・【親としての有能さ】・【親の抑うつ・罪悪感】・【親の健康状態】・【夫との関係】の項目を含み、これらは入学不安尺度「学校生活適応への不安」「基本的生活習慣への不安」「対人関係への不安」すべてと強い関連があることが示された。

表2 「入学不安尺度」と「育児ストレス PSI-SF」の相関

	PSI-SF 合計	子どもの側面	親の側面
入学不安合計	.574**	.500**	.501**
基本的生活習慣への不安	.398**	.247	.427**
学校生活適応への不安	.573**	.605**	.385**
対人関係への不安	.412**	.237	.465**

* $p < .01$,

3. 母親の入学不安と育児ストレス、肯定的・否定的養育行動との関連

母親の入学不安尺度、育児ストレスと肯定的・否定的養育行動（PNPS）の相関を求めたところ、表3に示す結果が得られた。入学不安尺度と「肯定的養育行動尺度」では、「意思の尊重」を除いた「関与・見守り」「肯定的応答」で負の相関がみられた。入学不安尺度と「否定的養育行動尺度」には相関はなかった。

育児ストレスと「肯定的養育行動尺度」では、全て負の相関がみられた。育児ストレス「子どもの側面」と「否定的養育行動尺度」では、「非一貫性」を除いて相関がみられた。「親の側面」では「過干渉」「日一貫性」を除いて相関がみられた。このことから、入学不安の高い母親は、子どもに対しての「関与・見守り」「肯定的応答」肯定的態度が低いことが示された。

入学不安尺度と「否定的養育行動尺度」は相関が無いことが示された。育児ストレスと「否定的養育行動尺度」においては、「子どもの側面」と「過干渉」・「厳しい叱責・体罰」に強い相関が示され、「親の側面」と「厳しい叱責・体罰」とに強い相関が示された。

表3 入学不安尺度、育児ストレスと肯定的・否定的養育行動との相関

	肯定的態度	関与見守り	肯定的応答	意思の尊重	否定的態度	過干渉	非一貫性	厳しい叱責・体罰
入学不安合計	-.366*	-.421**	-.315*	-0.162	0.175	0.042	0.158	0.233
基本的生活習慣	-0.188	-.316*	-0.252	0.092	0.189	-0.016	0.231	0.255
学校生活適応	-.395**	-.364*	-.343*	-0.257	0.141	0.078	0.068	0.202
対人関係	-0.274	-.367*	-0.156	-0.145	0.120	0.013	0.145	0.135
育児ストレス	-.557**	-.571**	-.447**	-.342*	.501**	0.277	.334*	.605**
子どもの側面	-.450**	-.354*	-.355*	-.381**	.438**	.433**	0.125	.483**
親の側面	-.513**	-.590**	-.391**	-0.274	.393**	0.062	.385**	.525**

** $p < .01$, * $p < .05$

4. 母親の入学不安、育児ストレスと子どもの特性との関連

入学不安尺度、育児ストレスと、「子どもの強さと困難さ」「自己主張と自己抑制」との相関係数を求めたところ、表4に示す結果が得られた。

入学不安尺度と「自己抑制」では、負の相関がみられた。子どもの「自己抑制」が低いと、母親の入学不安と「学校生活適応への不安」は高いことが示された。また、子どもの「問題行動」の得点が高い場合には、「学校生活適応への不安」が高いことが示された。

育児ストレスと子どもの特性との関連は、子どもの「自己主張」が高いと育児ストレス合計が高く、子どもの「友達関係問題」が高いと育児ストレスの「親の側面」が高いことが示された。さらに育児ストレス「子どもの側面」は「多動・不注意」「問題行動」「自己主張」と正の相関があり、「自己抑制」と負の相関があった。

表4 「入学不安尺度」「育児ストレス」と「子どもの強さと困難さ」「自己主張と自己抑制」の相関

	社会的行動	多動不注意	情緒不安定	友達関係	問題行動	自己主張	自己抑制
入学不安合計	-0.077	0.265	0.110	0.184	0.177	0.163	-0.313*
基本的生活習慣	0.133	0.126	-0.070	0.245	-0.003	0.117	-0.130
学校生活適応	-0.198	0.291	0.165	0.043	.317*	0.184	-.416**
対人関係	-0.031	0.199	0.120	0.244	0.022	0.083	-0.142
育児ストレス	-0.003	0.212	-0.056	.333*	0.196	0.257	-0.213
子どもの側面	-0.081	.369*	0.057	0.052	.296*	.311*	-.351*
親の側面	0.097	0.046	-0.153	.438**	0.075	0.147	-0.033

** $p < .01$, * $p < .05$

5. 「入学不安尺度」「育児ストレス」と母親の属性との関連

入学不安尺度、育児ストレスと、「母親の年代」「出生順位」「子どもの数」「親経験年数（長子年齢）」の相関を求めたところ、表5に示す結果が得られた。「基本的生活習慣への不安」と「出生順位」「親経験年数」「子どもの数」で負の相関がみられた。「基本的生活習慣への不安」は出生順位が上（長子）であるほど高く、子どもの数が少なく、親経験の年数が浅いほど高いことが示された。また、「対人関係への不安」は出生順位と親経験年数に負の相関あった。

母親の入学不安と「母の年代」に関連は見られなかった。

さらに、育児ストレスと「母の年代」「出生順位」「子どもの数」「親経験年数」にも関連は見られなかった。

表5 「母親の入学不安尺度・育児ストレス PSI-SF」と「母年齢」「出生順位」「子どもの数」「親経験年数」の関連

	母年齢	出生順位	子どもの数	親経験年数 (長子年齢)
入学不安合計	0.089	-.334*	-0.286	-0.292
基本的な生活習慣	0.111	-.417**	-.323*	-.384**
学校生活適応	-0.068	-0.171	-0.177	-0.105
対人関係	0.257	-.327*	-0.262	-.335*
育児ストレス	0.189	-0.265	-0.095	-0.156
子どもの側面	0.048	-0.189	-0.080	-0.059
親の側面	0.292	-0.244	-0.086	-0.187

** $p < .01$, * $p < .05$

6. 母親の入学不安と子どもの男女差との関連

母親の入学不安尺度の得点に、子どもの性別による差があるのかを検定したところ、表6に示す結果が得られた。母親の入学不安尺度に、有意な子どもの男女差は見られなかった。

表6 母親の入学不安尺度と男女差の相関

	男子		女子		t 値	
	平均値	SD	平均値	SD		
入学不安合計	45.49	12.995	45.89	12.271	-0.077	n.s
基本的な生活習慣への不安	9.41	3.308	10.56	4.355	-0.951	n.s
学校生活適応への不安	22.59	7.397	21.22	5.663	0.666	n.s
対人関係への不安	13.59	4.509	14.11	4.664	-0.373	n.s

7. 「入学不安」と「出生順位」

子どもの出生順位によって入学不安得点と各因子得点に違いが見られるかについて検討するため、一元配置の分散分析を行った。その結果、表7に示すように、基本的な生活習慣の不安において、出生順位の効果は有意であった。多重比較の結果、基本的な生活習慣の不安において有意差がみられた。第一子は第二子に比べて基本的な生活習慣の不安が高いことが分かった。

表 7 出生順位別「入学不安」の平均値

	第一子		第二子		第三子		F 値	多重比較
	平均	SD	平均	SD	平均	SD		
入学不安 合計	49.27	13.566	41.64	9.500	38.60	9.529	2.784	†
基本的な生活習慣の不安	11.23	3.861	8.21	2.887	7.40	2.408	4.874	** 第一子 > 第二子
学校生活適応不安	23.12	7.727	20.57	4.467	20.60	6.427	0.774	
対人関係の不安	14.92	4.866	12.86	3.978	10.60	1.342	2.517	†

** $p < .01$, † $p < .10$

8. 小学校入学前後の母親の入学不安、育児ストレス、養育行動、子どもの特性の変化

入学前と入学後に変化がみられるものがあると考え、各尺度を従属変数とする t 検定を行ったところ、表 8 に示す結果が得られた。

母親の入学不安尺度は「基本的な生活習慣への不安」にのみ有意差が見られ、入学前の方が母親の不安は高かった。合計点、「学校生活適応への不安」、「対人関係への不安」に有意差は見られず、入学前後で変化はなかった。

育児ストレスの合計点、「親の側面」、養育行動の「非一貫性」、子どもの「自己主張」、「自己抑制」に有意差がみられ、入学前の方が入学後よりも得点が有意に高かった。小学校入学前の方が、母親の育児ストレスや非一貫的な養育行動は高く、子どもの自己主張と自己抑制も入学前の方が高いことが認められた。子どもが、集団場面で自分の意志や欲求を抑制・制止しなければならない時に抑制する「自己抑制」も入学後に低下している。

育児ストレスの「子どもの側面」と「多動・不注意」にも有意傾向が見られ、「多動・不注意」に関しては、入学前の方が低い事を示した。

表 8 入学前と入学後の「入学不安」「育児ストレス PSI-SF」「養育行動 PNPS」「子どもの強さと困難さ」「自己主張と自己抑制」の平均値の比較

	入学前		>	入学後		t 値	
	平均	SD		平均	SD		
入学不安 合計	45.15	9.832	>	42.25	10.983	1.230	n.s
基本的な生活習慣の不安	9.95	3.720	>	7.85	3.117	2.926	**
学校生活の適応の不安	21.45	6.004	>	20.70	6.530	0.559	n.s
対人関係の不安	13.75	4.038	>	13.70	4.244	0.063	n.s
PSI-SF ストレス合計	45.95	5.539	>	39.30	8.099	4.471	***
PSI-SF 子ども側面	21.25	3.768	>	19.80	4.797	1.770	†
PSI-SF 親側面	24.70	3.278	>	19.50	5.104	5.860	***
非一貫性	7.85	1.424	>	7.05	1.432	2.629	*
多動・不注意	8.48	0.730	<	9.09	1.276	-2.077	†
自己主張	27.30	3.081	>	23.74	4.956	3.992	**
自己抑制	44.65	5.348	>	35.30	4.150	6.905	***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

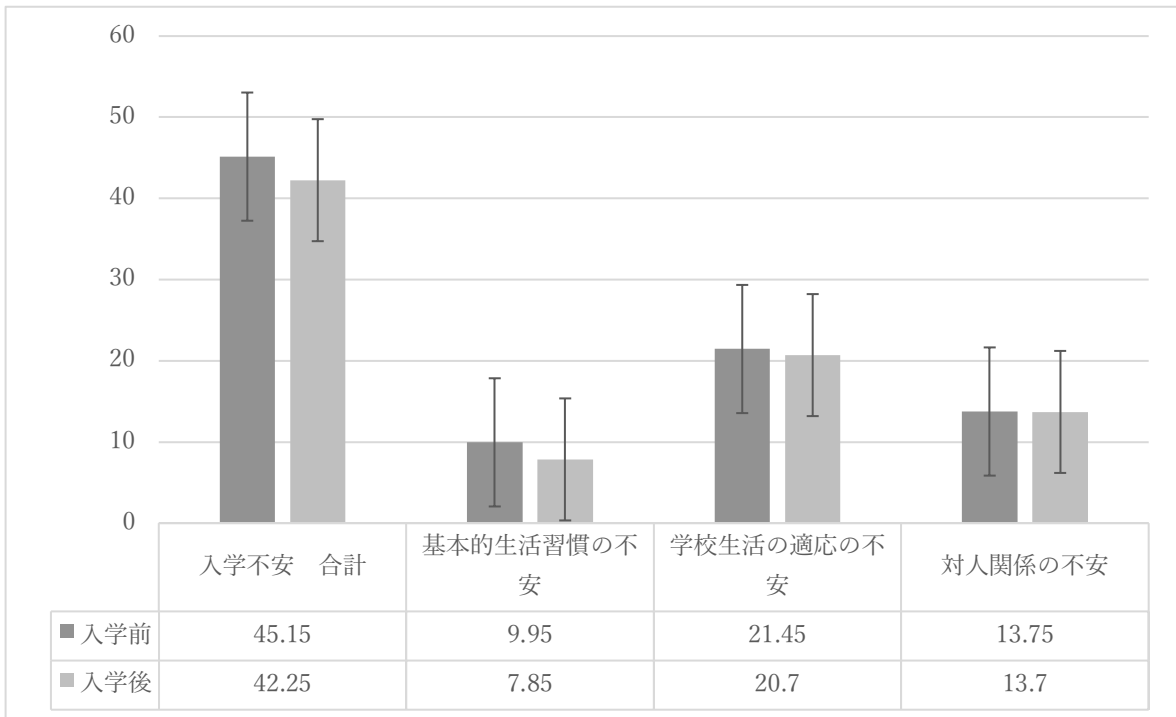


図 1 「入学不安」 平均値の比較

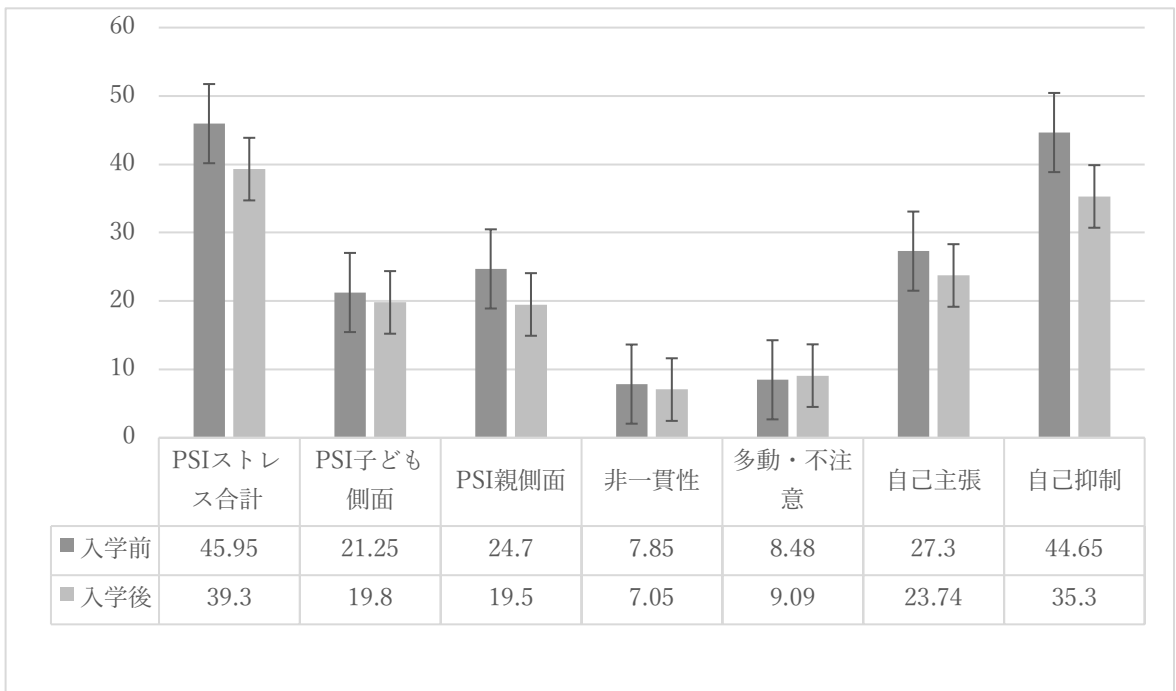


図 2 「育児ストレス PSI-SF」「養育行動 PNPS」「子どもの強さと困難さ」「自己主張と自己抑制」の平均値の比較

9. 新型コロナウイルスとの関連

母親の入学不安と新型コロナウイルスに関する相関を見たところ、子どものコロナ感染に対する不安傾向と母親の基本的な生活習慣への不安との間に相関がみられた($r=.459$)。母親のコロナ感染に対する不安と母親の対人関係への不安の間に相関がみられた($r=.453$)。また、母親自身のコロナ感染に対する不安と養育態度の「関与・見守り」との間に相関がみられた($r=.510$)。さらに、母親自身のコロナ感染に対する不安と過干渉との間にやや高い負の相関がみられた ($r=-.520$)。

IV 考察

1. 母親の入学不安尺度の信頼性、妥当性について

本研究では、母親の入学不安尺度を作成しその特徴について明らかにした。因子分析の結果、【学校生活適応への不安】、【対人関係への不安】、【基本的な生活習慣への不安】の3因子が抽出された。また、尺度全体の Cronbach の α 係数の値が $\alpha = 0.906$ と高いことから内的妥当性が確認された。現代の母親の入学不安は、【学校生活適応への不安】、【対人関係への不安】、【基本的な生活習慣への不安】の因子構造をもつことが分かった。

2. 母親の入学不安と親経験年数、子どもの出生順位・男女差

基本的な生活習慣の不安は、「母親の年代」と関連はなく、「出生順位」・「親経験年数」と関連がみられた。すなわち子どもが第1子で、親経験年数が浅い母親ほど、子どもの身につけさせる基本的な生活習慣に対する不安が大きいことが示された。また、そこに子どもの男女差は関係しないことも示された。

このことから、子どもの小学校入学に対する母親の不安は、母親の年齢は関係なく、子育て経験が大きく影響していることが明らかにされた。子育てが初めての第1子の母親は、子どもの小学校生活について母親自身も未経験であり、情報も少なく、準備はしているがどこまでの生活習慣の習得が必要であるかが分からない不安が大きいと考えられる。

大豆生田(2007)は、親子が安心して集う場の提供は、親が親として成長することを促すことにつながることを明らかにしている。また、「育ちへの不安感」は園の先生や友達のサポートと関連があり、子どもの発達や成長に関する悩みは母親同士や専門家である園の先生からの助言がサポートとして有効であると述べている。保育士は日頃から感じている母親の養育行動について、気軽に声をかけて話してみることで、親は自分の養育行動に気づくこともあるだろう。特に、子育て経験が浅い第1子の母親に対して、初めての子育ては周りの力を借りることも必要である事を知ってもらい、専門家である保育士からの助言などのサポートをうけ、子育てを共に協力して進めていくことが必要である。それは子どもが小学校に入学する時にも当てはまることが本研究から分かった。

3. 母親の入学不安尺度と「育児ストレスインデックス PSI-SF」・「肯定的・否定的養育尺度 PNPS」の関連

育児ストレスには、「子どもの側面」、「親の側面」がある。母親の入学不安尺度の「学校生活適応への不安」は子どもの側面と、「基本的な生活習慣への不安」・「対人関係への不安」は親の側面と強い相関がみられた。子どもの機嫌の悪さ・子どもの気が散りやすい/多動・人に慣れにくい・子どもに問題を感じるなど、日ごろから子どもの側面にストレスを感じている母親は、わが子が新しく小学校生活を送るにあたって、適応できるか不安が高いことが窺えた。

また、親の役割によって生じる制限・社会的孤立・親としての有能さ・親の抑うつ・罪悪感・夫との関係など、日ごろから育児において、親としての役割や、能力などにストレスが高い母親は、子どもに対して基本的な生活習慣を身につけさせることができているのか、対人関係は上手くいくのか不安が大きいと考えられる。

肯定的養育行動は、母親の入学不安尺度とも、育児ストレスとも負の相関がみられた。肯定的養育行動の子どもへの「関与・見守り」「肯定的応答性」が高

い母親は、育児ストレスも入学不安も低いことが示された。荒牧ら(2008)は、「肯定感」は、母親の育児感情を支える基盤であり、夫や友達・園の先生からのサポートが多いと「肯定感」は、高くなり、周囲の支えや助けも「肯定感」を支える上で重要であると述べている。幼稚園・保育園が中心となり、子育てを通じた保護者同士の関わりを深めていけるよう働きかけることは、「育児への肯定感」を支える点でも重要といえる。また、中谷ら(2006)は、育児ストレスは虐待行為を促進する重要な先行要因になり得るとしている。本研究でも、育児ストレスの高い母親は、「厳しい叱責・体罰」との関連が強く、「子ども側面」のストレスは、「過干渉」との関連が強く示された。

更に、子どもの小学校入学不安が高い母親は、育児ストレスが高く、肯定的養育態度が低いことが分かった。ただし、母親の入学不安と、否定的養育行動との関連は見られなかった。唐田(2008)は、育児不安は「育児に対する困難感や、それによって引き起こされる気持ちの落ち込み」と定義している。また、育児ストレスに関して奥村(2011)は、「母親が育児生活のなかである出来事をストレス源として認知し、それに対処行動を取ろうとした結果ストレス反応が引き起こされるという一連の過程が育児ストレスである」と述べている。

育児不安は育児に対する不安、焦燥感、怒り、苛立ち、空虚感、疲労感などの感情に伴うものであり、育児ストレスは育児不安という困難感によって引き起こされるストレス反応を表すものであると考えられる。従って、母親の入学不安が、直接的に母親の否定的養育行動との関連がなかったものと推測される。

更に、母親の自己評価による入学不安と育児ストレスと、保育者による子どもの特性（子どもの強さと困難さ・自己主張と自己抑制）との関連を見たところ、学校生活適応の不安と、子どもの「問題行動」「自己抑制」に相関を示した。子どもの問題行動が多く見られる場合や、子どもが集団場面で自分の意志や欲求を抑制・制止しなければならないにもかかわらず自己抑制が低い場合、母親の「学校生活適応への不安」は高いことが示された。

母親と保育士がコミュニケーションでつながることは、母親の不安を軽減することに繋がる。保育士が感じている子どもの特性や問題傾向は、親も同じように漠然と感じていることが多い。保育士の客観的な見方は、母親のストレスと一致している。子どもの問題行動や自己主張・自己抑制などは、集団の中で子どもを見ている保育士には見透しがつくことであり、母親にアドバイスすることができる。保育士が日頃、子ども・母親の育児に対して感じている違和感などは、同時に漠然と母親も感じており母親のストレスに繋がる事がある。保育士はプロとしての自信を持ち、保育士側から積極的に母親にアプローチし接することも必要であろう。

4. 母親と子どもの入学前と入学後の変化

母親の入学に対する「基本的生活習慣への不安」は、入学後に低下していた。これは、実際に小学校生活が始まってみると、入学前に考えていたよりも親が身に付けさせた基本的生活習慣の困りごとは少なく、うまくできていたためではないか。特に育児ストレス「親の側面」は基本的生活習慣の不安と強い相関を示したが、入学後は低下し、親役割のストレスは低くなることがわかった。

一方、子どもの行動では、「社会的行動」・「情緒不安定」・「友達関係問題」・「問題行動」などは特に変化はないものの、「多動・不注意」が入学後に高くなっている。これは、遊びの場面が多い保育園・幼稚園の環境では目立たなかった部分が学びの場面が多くなったことにより、席に落ち着いて座っていられな

かったり、忘れ物など個人の行動として、目立つようになったのではないかと思われる。

さらに「自己主張」・「自己抑制」が入学後に低くなっていた。自己主張で自分の意志や欲求を明確に持ち、これを他人や集団の前で表現し、主張する部分は、まだ慣れない環境でクラスでの集団に順応できず自己を出し切れないのではないかと推測する。特に調査をした時期は新型コロナウイルスで学校生活も平時と異なり慣れにくかったと考えられる。また、集団場面で自分の意志や欲求を抑制・制止しなければならないときの自己抑制は、新型コロナウイルスによる自宅生活が長く、休日が延長した状況での生活のなかでの気持ちの緩みなどの影響も考えられる。

5. 新型コロナウイルスとの関連

母親の入学不安と新型コロナウイルスとの関連では、子どものコロナ感染に対する不安と基本的な生活習慣への不安との間に相関がみられ、子どもにコロナに対する不安が大きく表れると母親は基本的な生活習慣の乱れに対する不安が大きいと考えられた。母親がコロナ感染に対する不安が高い場合は、対人関係への不安も高まる。また、母親のコロナ感染に対する不安と養育態度の関与・見守りとの間に($r=.510$)相関がみられ、コロナ感染への不安は子どもへの関与・見守りが高まることが示された。さらに、母親のコロナ感染に対する不安と過干渉との間に($r=-.520$)の高い相関がみられ、母親のコロナ不安は子どもへの過干渉が低下することが示された。平時とは異なり、新型コロナウイルス感染への不安が多少なりとも母親の不安や養育態度に影響を与えていたと考えられる。

6. まとめ

本研究では、母親が子どもに抱く小学校入学不安は、親経験の未熟さ、子どもの問題行動と関係することが分かった。また、母親の不安の重責はストレスとも深く影響し、ストレスは否定的養育行動に傾きやすい。経験の浅い母親が抱える育児不安の段階での子どもの発達や成長に関する悩みは、同じ母親同士や専門家である園の先生からの助言などのサポートが有効になると考えられる。

また、肯定的養育行動と、入学不安、育児ストレスとの関連が大きいことも明らかとなった。西出ら(2011)は、自己効力感が高い母親は生活に対して前向きな気持ちが働き、育児を楽しむ余裕を持つことができるため、充実感や満足感を得ることができる。加えて、自己効力感の高い母親は、育児にまつわる否定的な思いにも自分で納得ができる対処がとれているため、育児期の母親の心の健康度に与えるプラスの要因になっていると述べている。肯定感や母親の育児感情を支える基盤となりうる。

さらに、夫や友だち・園の先生からのサポートが多いと肯定感も高くなるため、周囲の支えや助けも育児への肯定感を支える上で重要であるといえる。個別相談体制の整備をすること、様々な手段を活用した相談しやすい体制の整備が望まれる。中岡ら(2013)は、子育ての悩みは、子ども自身のことから家族関係にかかわるものまで多岐にわたり、多角的総合的な相談ができる体制が望まれていると述べている。そこで、専門家に相談できるよう橋渡しになるだけでなく現場の職員など普段から子どもに接する機会のある(家庭状況を理解している)職員との相談体制を整備することが重要である。また、参加すること

で肯定的な変化が得られるような保護者対象の心理教育プログラムの提供など、人や時間等の物理的な支援だけではなく、意識や行動の肯定的な変化を可能にするような心理的支援を提供することも必要であろう。

人との関わり方が上手でない子ども達が多い現状では、色々な形で友達同士のトラブルが起こることはとても自然なことである。様々な子ども同士の関わりの中で、教師や親は子ども達に成功体験、失敗体験の両方を体験させることを大事にしたい。そういった関わりの中で、友達との関係について基本的な考え方の基盤を作り、具体的なスキルを獲得していくことになる。児童自身に自信を持たせることは学校への適応に繋がると同時に、危機的移行を乗り越える経験は、子どもを成長させる。その意味では、幼小の段差を完全に取除くのではなく、それを認識した上で乗り越えさせるということも大切ではないかと考えられる。また、その姿を保育者とともに見守ることが、母親の入学不安を和らげることに繋がるといえよう。

7. 謝辞

本研究のために、貴重な時間を割いて回答いただいた協力者の皆様に心より感謝いたします。また、関係各所ならびに調査実施にご尽力頂きました施設の職員の皆様に心より感謝いたします。最後に、本研究にあたり、ご指導頂きました諸先生方に心より感謝申し上げます。

V 引用文献

- 有嶋誠(2017). 「幼稚園の「遊び」から小学校の「学び」への円滑な接続に関する一考察：小1プロブレムに関する保育者の認識と保育現場の対策」宮崎学園短期大学紀要(10),1-14,20175.
- 荒牧美佐子・無藤隆(2008). 「育児への負担感・不安感・肯定感とその関連の違い：就学児を持つ母親を対象に」発達心理学研究 第19巻, 第2号,87-97.
- Bandura, A. 原野広太郎監訳(1979). 社会的学習理論, 金子書房, 東京.武井祐子・寺崎正治・門田昌子(2006).幼児の気質特徴が養育者の育児不安に及ぼす影響 川崎医療福祉学会誌,16,221-227.
- 伊藤輝子・山内昭道・岩崎洋子(1997). 「幼稚園・保育園・小学校の教育連携の実態と課題—来年度就学予定児を持つ保護者の不安に対する保育の課題—」『保育学研究』第2号、136-143.
- 神田直子・山本理絵(2007). 「幼児期から学童期への移行期における親の子育て状況と不安, 支援ニーズ」第4回愛知の子ども縦断調査」結果第1報一」『愛知大学文学部論文集』第56巻, 17-33.
- 木村一絵・西内恭子・平野(小原)裕子・高田ゆり子(2006). 「母親の育児意識を構成する概念とそれに関連する要因」『九州大学医学部保健学科紀要』第7号. 69-76.
- 唐田順子(2008). 「乳児をもつ母親のサポート状況と育児不安との関連：病産院サポートを含めた分析」母性衛生,48(4),479-488,2008-01-01.
- Landesman,R.S,Gaines L.R,Phillips M. & Ramey C,(1998).“Perspistives of

- fomer Head Start children and their parents on school and the transition to school”the Elementary school journal 98:311-327.
- 盛真由美, 尾崎康子(2007). 「幼稚園から小学校への移行における適応過程に関する横断的研究」: 富山大学人間発達科学部紀要 2 (2): 175-182.
- 牧野カツコ(1982). 乳幼児を持つ母親の生活と<育児不安>家庭教育研究所紀要,3, 34-56.
- 中岡素子・小川佳代・富田喜代子・前田宏治・加藤孝士・石原留美・尾崎八代・中澤京子・三木章代・吉村尚美・江口実希・富田真佐子(2013). A 県における子育て支援ニーズに関する調査研究(その1) - 子育ての悩みやストレス解消法の地域比較. 四国大学紀要(A)40:1-12.
- 中嶋みどり(2005). 児童虐待の認知に関する育児意識要因の検討. 母性衛生, 46(1), 193-200.
- 中谷奈美子・中谷素之(2006). 母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響. 発達心理学研究,17(2),148-158.
- 西出弘美・江守陽子(2011). 育児期の母親における心の健康度(Well-being)に関する検討. 小児保健研究.第70巻.第1号
- 奥村ゆかり・松尾博哉(2011). ベビーマッサージが母子双方のストレス反応に及ぼす効果に関する研究.母性衛生,545-556.
- 大豆生田啓友(2007). 「支え合い、育ち合いの子育て支援」・関東学院大学出版会
- 尾木直樹(1999). 『「学級崩壊」をどうみるか』日本放送出版協会
- 岡崎由美子・安藤美華代(2014). 心理教育“サクセスフル・セルフ”を活用した小学校低学年の親子コミュニケーション支援の試み.岡山大学教師教育開発センター紀要第4号 56-62.
- 佐藤達哉(1994). 育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連. 心理研究,64(6),409-416.
- 島田三重子・神谷整子・筑後幸恵・藤本栄子(1997). 育児不安の事例から見た産後の母親援助.母性衛生,38(4),343-349.
- 住田正樹・溝田めぐみ(2000). 母親の育児不安と育児サークル、九州大学大学院教育学研究紀要 3号 23~43.
- 田邊道行(2010). 「入学職の子どもが学校生活に適應するための学校体制の工夫—幼稚園・保育所と小学校との円滑な接続を考慮した「安心スタートプラン」の実践を通して—」『教育実践研究』20,pp307-312
- 手島聖子・原口雅浩(2003). 乳幼児健康診査を通じた育児支援: 育児ストレス尺度の開発 福岡県立大学看護学部紀要,1, 15-27
- 山本多喜司, S・ワップナー(1992). 『人生移行期の発達心理学』北大路書房,152-153.